

留学生の日本語学習に関する心理学的研究

— 中国人留学生の漢字学習を中心として —

陳 西梅

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

中国語を母国語とする中国人は、日本に留学し日本語を第二言語として学習することになる。漢字を一部の構成要素として用いる日本語を学習する際に、彼らには特別な言語学的・心理学的・社会学的問題のあることが指摘されている。しかし、これらの点を解明する実験的研究は少ない。本研究は、実験を通じて、彼らの日本語学習における心理学的・言語学的問題を検討することを目的とする。

【実験1】：日本語漢字の意味、音韻学習が記憶に及ぼす効果の比較

■方法

学習材料 漢字2字熟語を15語選び、2つのリスト(①意味学習材料、②音韻学習材料)を作成した。

被験者 大学・大学院に在学する20名の中国人留学生をA・B2群に分けた。

手続き A群はリスト①を系列予言法で学習し、さらに中国語の訳語で予言させる試行を5回行なった。B群はリスト②を系列予言法で学習し、日本語の読み方で予言させる試行を5回行なった。

●結果と考察

全体的に意味学習の成績が優れていることを示している(図1)。実験条件×予言試行について分散分析を行なったところ、A・B条件及び試行のいずれにも有意差があった。これは、意味の理解と記憶においては漢字についての既習知識が利用され、成績を向上させるという仮説を支持するものである。本実験の結果によって、漢字の意味学習の方が、音韻学習よりも正反応の多くなることが明らかになった。これは漢字の既習知識が意味学習に促進的な影響を及ぼすことを示すものである。

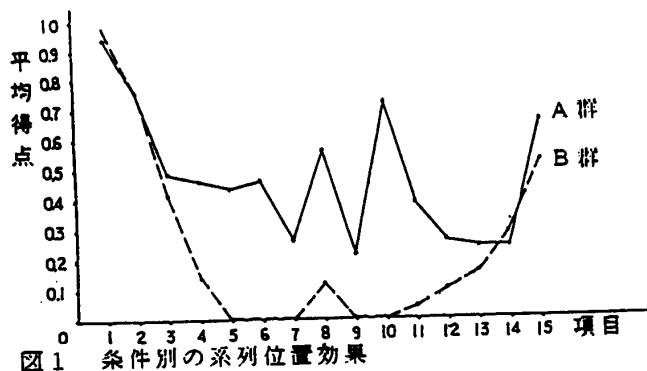


図1

【実験2】：言語の干渉効果

■方法

刺激材料 色彩命名のターゲットとして3種の色(黄・緑・黒)を用い、それらを40個配列して異なる表記形態(色板・ひらがな・漢字)の刺激カードを3枚作成した。

被験者 大学・大学院に在学する中国人留学生16名。

手続き 被験者は3種の刺激に対して、中国語(母国語)と日本語(第二言語)で反応させた。色板は色名を、文字は文字の意味ではなく、その着色された色彩名を中国語あるいは日本語で、できるだけ早く言うように教示した。反応に要する時間と誤反応を干渉の程度を表す測度とする。

●結果と考察

言語干渉の2つの指標である反応時間と誤反応について3種の刺激カード×2種の反応語の分散分析を行なった。漢字の刺激に対して中国語(母国語)で反応する場合、その反応時間は長く、誤反応数も有意に多かった(図2)。ひらがなの刺激に対する日本語(第二言語)での反応でも、その反応時間は長く、誤反応数も有意に多かった。つまり、言語内干渉が言語間干渉より大きいことが示された。また、全体的に日本語での反応時間が長く、誤反応が多かったという結果は、本実験の被験者にとって母国語の中国語が優位であることを示している。これは、第二言語がまだ十分に習得されていないために、同一言語内での干渉が多く生じた芳賀(1984)の結果と一致する。以上の2つの実験の結果より漢字を用いる中国人留学生が、日本語を学習するときには、母国語の既習知識が促進的效果を持つと共に妨害的效果をも持つことがわかる。

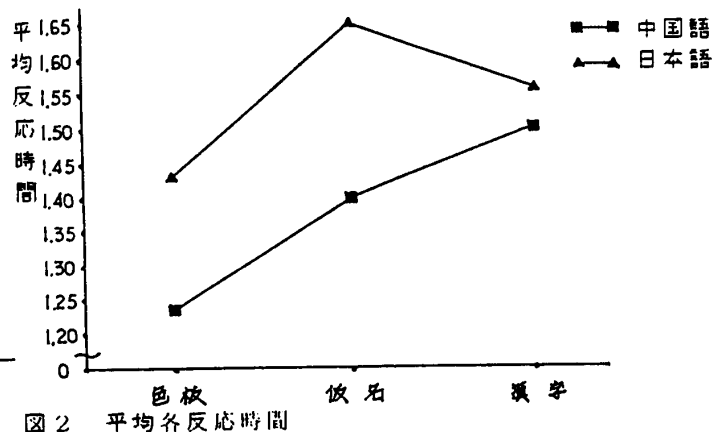


図2